

玉名市文化財調査報告 第35集

高岡原遺跡

玉名市山田における店舗新築工事に伴う文化財調査報告書

平成29年3月

玉名市教育委員会

玉名市文化財調査報告 第35集

高岡原遺跡

玉名市山田における店舗新築工事に伴う文化財調査報告書

平成29年3月

玉名市教育委員会

序 文

玉名市は、熊本県北部の菊池川下流域に位置しており、旧石器時代からの長い歴史を持ち、豊富な文化財が所在する地域です。九州新幹線が開通して5年目を迎え、政治経済、教育文化、観光の中心としてさらなる発展を遂げようとしています。

このような中で玉名市教育委員会では、様々な開発事業と発掘調査の円滑な調整のため、埋蔵文化財保護行政の充実に努めているところです。また、その成果の公開、活用を通じて広く教育、文化の発展に寄与できればと考えております。

本書は、店舗新築工事に伴う高岡原遺跡の調査成果をまとめたものです。本書が、市民の方々の文化財に対する理解の一助となり、また学術研究にも広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、調査並びに報告書作成にあたっては、各方面で多くの方々に多大なご理解とご協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げます。

平成29年3月24日

玉名市教育委員会
教育長 池田 誠一

例 言

1. 本書は、玉名市教育委員会が平成 28 年度に実施した玉名市内遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、玉名市教育委員会文化課蜷父雅史、古森政次が担当した。
3. 本書掲載遺構及びトレンチなどの実測図は、調査担当者が作成した。
4. 遺構の製図、遺物写真撮影は古森が行った。
5. 調査時の写真撮影は、調査担当者が行った。
6. 図中の方位は磁北を示す。
7. 第 1 図、高岡原遺跡内の過去の調査については、位置を●で示し、横に年度を付した。
8. 図版 5～10 の遺物写真は、左が外面、右が内面である。
9. 出土遺物の整理作業は、玉名市文化財整理室で、古森が行った。また、当室で図面類や遺物を保管している。
10. 本書の執筆、編集は古森が行った。

本文目次

序文	
例言	
本文目次	
挿図目次	
写真目次	
I 調査の概要	1
1 調査の体制	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の概要	
1 遺跡の地理的環境	3
2 遺跡の歴史的環境	3
3 検出遺構と出土遺物の概要	6
III 調査の成果	
1 中世の遺構と遺物	9
2 近世・近代の遺構と遺物	16
※参考文献一覧	17
IV 総括	18
報告書抄録	29

挿図目次

第1図 周辺の遺跡分布図	4	第9図 S04・05土層断面図	12
第2図 玉名市地形区分・水系図	5	第10図 S03・06土層断面図	12
第3図 高岡原遺跡遺構分布図	6	第11図 S12実測図	13
第4図 S03実測図	9	第12図 S13実測図	14
第5図 S02・03土層断面図	9	第13図 S16実測図	14
第6図 S14実測図	10	第14図 S10実測図	15
第7図 S15実測図	11	第15図 S17実測図	16
第8図 S04～07実測図	11	第16図 大野別符内城館位置図	18

写真目次

写真1 調査風景(S03)	1	図版5 S03出土遺物	23
写真2 調査風景(S07)	2	図版6 S03出土遺物	24
写真3 調査風景(S04・05)	2	図版7 S03・柱穴出土遺物	25
図版1 S02・03遺構写真	19	図版8 S02出土遺物	26
図版2 S06・S03東側柱穴群遺構写真	20	図版9 S04・05・07出土遺物	27
図版3 S04・05・07遺構写真	21	図版10 S07・08・09・11・01出土遺物	28
図版4 S01・10・12遺構写真	22		

I 調査の概要

1 調査の体制

調査及び報告書の作成は、下記の体制により実施した。

調査主体	玉名市教育委員会
調査責任	教育長 池田誠一
調査総括	教育次長 前田敏朗 文化課長 竹田宏司
庶務担当	文化財係長 田中康雄 主事 西畠涼子
調査協力	楠田トミコ 坂川昭利 高本武夫 岡村和正
調査担当	主任 齋藤雅史（確認・本調査）
埋蔵文化財発掘調査員	古森政次（本調査・整理作業）
発掘作業員	築地浩昭 谷口洋介 主地本敦 寺本涼子 出口加代子 村上厚生 西村真由美 竹内ムツ子 清田栄子 北原靖治 塚本廣二 中川幸一
整理作業員	坂崎郷子 藤井めい子
資料調査助言	美濃口雅朗、竹田知美

2 調査の方法と経過

(1) 調査に至る経緯

平成28年5月、大規模な店舗建設計画における事業照会を受けて、5月12日～5月21日に計画地内の確認調査を実施した。その結果、計画地内の東側において、主に中世と考えられる遺構が確認された。

遺構が確認された区域は、主に東側の店舗進入路及び駐車場予定地であり、広範囲で1m以上の掘削が予定されていた。このため、設計変更等の協議を行ったが、変更が不可能であることがわかり、追加の確認調査を実施し、工事による埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲を確定した。

その後、工事主体者から文化財保護法第93条により文化庁長官あての届出（平成28年7月5日付）が提出された。届出を県教育委員会に進達し、熊本県教育長から工事前に発掘調査を実施するよう通知（平成28年7月15日付教文第703号）を受けた。

通知を受けて、玉名市と主体者で発掘調査についての契約書及び協定書を締結した。その後、玉名市教育委員会から文化財保護法第99条により文化庁長官あて発掘調査の通知（平成28年8月2日付玉名市教文第175号）を行い、発掘調査に着手した。

(2) 調査の方法

試掘・確認調査について、玉名市では、幅0.7～1m程度のトレンチを設定し、重機による掘削を行い、重機が使用不可能な場合や包含層の一部、遺構については人力による掘削を行っている。対象面積に対



写真1 調査風景(S03)

する試掘・確認調査のための掘削面積等については基準を定めていないが、開発の内容、予想される遺跡の内容、地形等から過不足のない面積を設定している。

実測図は、1/20縮尺を基本として、平面・断面図を作成している。また、トレンチなどの配置図については開発側の測量図や公的な字図などに記入している。地形測量図などが必要な場合には、平板測量やトータルステーション機器を使用し、1/100縮尺で作成している。なお、調査地点を含めた広範囲で精度の高い地形測量が必要な場合には、業者への委託も行っている。

写真は、通常、35mmカラーフィルムを装填したカメラやデジタルカメラによる撮影を行い、重要な遺構・遺物が確認された場合には、モノクロ及びリバーサルフィルムによる撮影を追加している。

(3) 調査の経過（日誌抄）

〈8月8日〉表土剥ぎ立会い。遺跡の東側1/3の表土を剥ぐ。中世の堀跡らしい溝発見。幅3mほど。

〈8月10日〉遺跡の全容がわかった。遺跡東側に南北

I 調査の概要

に幅3mの溝があり、西側に、それに並行する3~4本の道路跡が並んでいる。

〈8月17日〉南北に走る3~4本の道路跡のうち、最も西側を走る道路を調査。S01とする。中世中国陶磁器片とともに近世陶磁器類が出土。

〈8月18日〉南北に走る3~4本の道路跡のうち、最も東側を走る溝を調査。上部には道路状遺構 (S02) が



写真2 調査風景 (S07)

あり、下部に溝状遺構 (S03) が存在する。下部が中世期、上部が近世期と思われる。中世溝の上面で発掘をとどめながら南に向けて発掘を進める。

〈8月24日〉東側南部を発掘。S03は南部端で幅が50cmほどとなり、深さも浅くなっている。中国陶磁器の白磁が出土。S03のものか。

〈8月25日〉S03及び不明遺構とした土坑の重なり新旧関係が明らかとなった。S03の後に土坑が2つ接するように造られていることが判明。南側をS04とし北側をS05とした。S04からは石臼片が出土。2つの土坑はいずれも上面が硬化しており、その上面に染付椀の破片が出土している。したがって、この染付片はS02に伴うものと判断できる。新旧関係を追うと、S03 (中世) →S04・05 (土坑、中世) →S02 (道路、近世?) という関係か。

〈8月29日〉S06の土層断面を写真撮影。明らかにS03の溝の後に造られていることがわかる。外面に草花文を施した中国製の青花出土。ただ、原位置が不明。S03の最下層と思われる。S03最後の掘り下げを進める。

〈9月1日〉東側北部土坑S08掘り下げ。調査期間終了が迫っているため、スコップによる発掘。埋土中よりプラスチック出土。落胆深し。

〈9月6日〉今日から作業員半数。中央北部S09完掘。下層より鉛銃弾出土。球状。西側南部に並んでいた柱列の最終確認のため、S01を部分的に掘り下げ、結果、掘立柱建物が復元された。S10とする。柱穴底部は白色系の粘土を突き固めている。

〈9月7日〉雨天予想のため現場休み。午前、現場にてS03東側の柱穴群から建物になりそうな組み合わせを探す。

〈9月8日〉S03東側の清掃作業、柱穴検出、建物確定、写真撮影、柱穴発掘。

〈9月12日〉雨のため発掘作業休み。S03東側の柱穴



写真3 調査風景 (S04・05)

群より建物復元作業継続。新たにプレハブ設置場所付近より2間×2間の総柱建物検出。新たな知見として、建物群に2つの群が見られそうだ。

〈9月13日〉S10掘立柱建物、S11中世土坑、S03東側土坑群、S03東側柱穴群などを発掘。発掘が進む。

〈9月14日〉雨天発掘になる。9:30ころから降雨中断、10:30再開、終了まで。総柱建物、S03 東側全景の写真撮影。道具類の撤収。総柱柱穴より、内面に草花文をあしらった染付底部出土。明瞭な呉須が印象的。写真撮影。

〈9月21日〉S03東側1/20プラン実測。S12~15まで終了。S10及び16のプランは月曜日に行う予定。

〈9月27日〉掘立柱建物エレベーション測量終了。実測ポイントを平板に記入。S03土層断面及び土坑S07土層断面線入れ完了。S04・05土層断面完了。トイレ汲み取り。機材一部撤収。

〈9月28日〉コンテナハウス及びトイレが業者により撤収。図面類、調査機材は公用車へ。

〈9月29日〉7項目の残務点検を行い、終了。

II 遺跡の概要

1 遺跡の地理的環境

平成28年度の本調査区は、玉名市山田2082-1に所在する（第1図）。北には、なだらかな山容の小岱山があり、東には阿蘇外輪山の湧水に源を発する大河菊池川が流れ、玉名市で海に注ぐ。川は上流域との比高差が小さく、ゆったりとした水量豊かな流れである。南は海に向かって傾斜する台地が続く。この台地は「玉名台地」と呼ばれ、小岱山と海岸平野との間を東西に長く続いており、平野から2~15m高い。遺跡は、この玉名台地の縁に立地し、西と北には10m以上の崖があり、崖下には水田が広がる。

玉名台地の形成には、地学上の三つの出来事が関係している。最も古い出来事は小岱山の山塊をつくる花崗岩の隆起運動（中生代）である。この継続した隆起により「台地」の基盤がつけられた。

次が、現在の阿蘇カルデラを造った巨大な火砕流噴火である。約9万年前、4回目の噴火で流れ出た火砕流が玉名地方に押し寄せ、谷や平野を火山灰や軽石などで埋めつくし、平らな大地をつくった。

最後が、約1万8千年前に頂点を迎えた海退現象である。氷河期、氷河の発達で最大100m以上も下がった海水面に流れ込む菊池川などの河川は勢いを増し、火砕流堆積物で埋まった大地の浸食を進めた。この時、浸食があまり進まずに取り残された部分が玉名台地である。

その後、約6000年前、氷期の後の温暖化のピークには海水面が急上昇し、現在より5m高い場所まで海岸となった。このため、浸食のスピードは鈍り、逆に土砂の堆積が進んだ。土砂の堆積は、菊池川などの河川に肥沃な平野をもたらした。また、土砂の堆積で菊池川河口域は遠浅の海となり、干拓には好適の海となった。

遺跡の西を南に流れる境川でも、浸食より堆積が上回り、谷というより平野の景観となっている。

このような自然環境は、玉名地方に多くの恵みをもたらした。南に面した玉名台地は、日当たりも良く、また、水害に強い好適な居住地となり、有明海

や玉名平野は豊かな食料を供給し、小岱山は良質の湧水や燃料、それに山塊の花崗岩に含まれる鉱物から砂鉄をもたらした。

そして、地政学的に最も重要なのは菊池川存在である。県北地域に網の目のような支流を広げた菊池川は玉名市で一本にまとまり海に注ぐ。言い替えば、玉名市は、菊池川を通じて、県北のほとんどの地域と密接につながっていることになる。

2 遺跡の歴史的環境

玉名地方の歴史的特徴を明らかにする上で最も大切な視点は、「菊池川」と「港」である。なぜなら、中央と地方、地方と地方をつなぐ大動脈は、明治時代以降、次第に鉄道と道路に代わられたが、それまでは圧倒的に海と川であった。

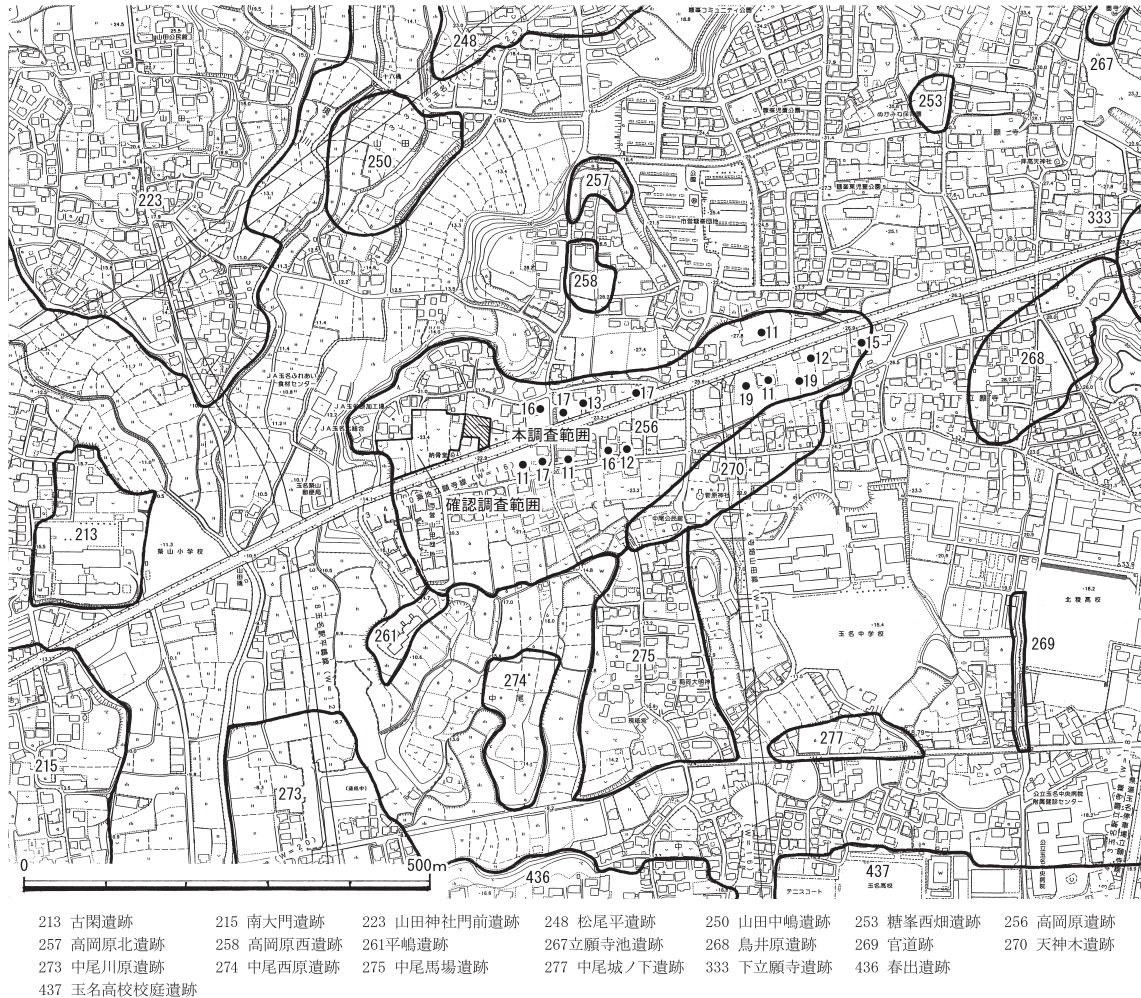
1でもふれたように、地政学上、玉名地方は県北地域の要となる地である。海外や国内の物資や情報は、有明海を渡り、菊池川河口部に築かれた玉名地方の港に陸揚げされ、菊池川を伝って県北地域にもたらされるのである。逆に、県北の物産は菊池川を船で下り、玉名地方の港に集まり、他の地域に運ばれることになる。集まってきた物資の取引（売買や交換）は港の近くで開催される市で行われ、大きな富を生むことになる。

したがって、港や市は地域の権力者にとって、最も重要な場所であり、強力に支配、管理されることになる。つまり、菊池川流域に興亡した権力者は玉名地方を確保することが最も大切な政治課題だったのである。

弥生時代、九州の有明海周辺では佐賀県吉野ヶ里遺跡のような大集落が出現する。大集落の近くには港が築かれ、盛んに交易が行われたようだ。このころ玉名地方でも大集落が出現している可能性が強い。それは、玉名台地を中心とした地域に弥生時代の遺跡が県下でも有数の密集度を示していることから明らかである。

古墳時代、玉名地方では、和水町江田船山古墳、玉名市山下古墳、玉名市岱明町院塚古墳、玉名市天水町大塚古墳、玉名市石貫穴観音古墳、玉名市永安寺東古墳など県下でも名だたる前方後円墳や装飾古墳が築かれる。その背景に、「菊池川」と「港」を

II 遺跡の概要



第1図 周辺の遺跡分布図

支配した権力者が大きな富を手にしていて物語っている。

古代（飛鳥・奈良・平安時代）には、古墳時代の豪族の末裔とされ、玉名郡の郡司となった日置氏が玉名地方の権力者として「菊池川」と「港」と支配したと考えられている。

平安時代後半から中世（鎌倉・室町時代）にかけて全国に広がった「荘園」は、玉名地方にも及び、そのほとんどが荘園化された。そして、玉名市の菊池川より西側の地域の荘園「大野別府」は大野氏、東側の地域の荘園「伊倉別府」は伊倉氏が支配するようになった。両氏とも在地勢力として力を持った武士であり、大野氏が北の高瀬の港を、伊倉氏が南の伊倉の港をその支配下に置いていたようだ。

ところが、中世の肥後は菊池氏が最も有力な武士として存在していた。しかも菊池氏は菊池川流域を支配した武士である。おそらく、大野氏も伊倉氏も

その配下として行動したと考えられる。このような状況の下、ついに高瀬の港は菊池氏一族である高瀬氏が支配し管理することになった。

戦国時代、菊池氏の力が弱まると、高瀬・伊倉の港は豊後大友氏や肥前竜造寺氏が次々に攻め入り、その支配をめざした。やはり、九州でも重要な港の一つだったのである。

ところで、弥生時代以来と考えられる「港」はどこにあったのだろうか。高瀬と伊倉の港は著名であり、高瀬は江戸・明治時代まで繁栄している。

弥生時代から古代までの港ははっきりしないが、玉名駅前に「大湊」の字名残っており、古代の港とされている。当時、玉名駅の南は入り江となっており、繁根木川や境川も入り江に流れ込んでいたようだ。おそらく、弥生・古墳時代の港も境川が入り江に流れ込む河口部にあったのではなかろうか。

II 遺跡の概要

3 検出遺構と出土遺物の概要

(1) 検出遺構

第3図は高岡原遺跡の今回の調査で検出された遺構の分布である。検出された遺構として、掘立柱建物、条溝、土坑、道路状遺構、ピットがある。それぞれについて概要を記す。

①掘立柱建物 8棟 (S10、S12～17、S31)

8棟は、3つのグループに分かれる。

A: 建物方向が条溝 (S03) に並行している。柱穴埋土 (遺構内に埋まった土) もS03の下層部分に類似している。S14・15がこれにあたる。

B: 建物方向が条溝 (S03) よりやや東に振れてい

る。柱穴埋土はAと同様である。S12・13・16がこれにあたる。

C: 建物の長軸方向が磁北に近く、また、埋土が黒褐色を呈している。S10、S17、S31がこれにあたる。また、S10、S17 は他の建物に比べ柱穴の径が大きい。

3つのグループは、その存続期間に新旧が存在するのは明らかだが、遺構間の新旧関係を示す重なりや出土遺物での明らかな差異は見いだせない。

②条溝 1条 (S03)

詳しい解説はIII章で行うが、その形状から見る



第3図 高岡原遺跡遺構分布図

II 遺跡の概要

と、同じ玉名市内に所在する岩崎城跡の発掘調査で検出された土塁状遺構で、土盛の内側に掘られた溝によく類似している。おそらく、当遺跡でも、条溝の西側に土盛、さらにその西側に一条の溝を持った土塁が存在したものと考えられる。

③土坑 13基 (S04～09、S18～24)

大きさや形状から4つのグループに分けられる。

A：長楕円形で、長軸の長さが5m前後となる大きな土坑。S07、S11、S23、S29が該当する。

B：直径2.0m前後の円形で、底部が袋状に広がる。S04～06が該当する。

C：隅丸の長方形で、長軸で1～2mほどの大きさである。S08、S18～21、S24が該当する。

D：正円形で、内部はボウル状である。S09、S22が該当する。

AとBの土坑であるS07・S06と条溝S03、それに道路状遺構S02は重なっている。精査の結果、S07・S06はS03より新しく、S02より古いことが判明した。また、Aの土坑であるS23は道路状遺構であるS28に壊されていることも確認された。したがって、A、Bの土坑は条溝S03より新しく、道路状遺構より古いことになる。

Dの土坑は、S09と道路状遺構の重なりが見られ、精査の結果、S09が新しいことが判明している。

Cの土坑は、(2) 出土遺物の項で述べるように時期決定できるような情報はないが、条溝に沿うように造られており、条溝の時期に存在したことが予想される。なお、S08はプラスチックの破片が出土しており、現代と考えられる。

④道路状遺構 6条 (S01～02、S25～28)

当初、道路状遺構は明確な輪郭が不明であった。それは、S03より東側の表土剥ぎで、剥ぐ深さを下げすぎたことが原因で、路面にあたる地面が硬化した部分がまだら状になっていた。また、晴天続きで、乾燥した天候も検出を妨げていた。しかし、雨天時を利用し、確認を行い、輪郭だけはつかむことができた。全面発掘はできなかったが、その概要は押さえることができた。

道路状遺構には2つのタイプが見られる。1～2mの幅で硬化面が続いているもの (S02、S25、S26) と、

約4mの幅で中央部に約2m幅の硬化面が続いているもの (S01、S27、S28) である。後者の硬化面の下は深さ約20cmの溝状になっている。

S02、S25～26の3本の道路状遺構は、条溝S03との関係を考慮する必要がある。条溝S03は、土塁の一部と考えられ、S03の西側に土盛と溝が伴っていたと考えられる。したがって、3本の道路状遺構は土塁が機能を失い、削平された後の遺構ということになる。

S01では、S10の柱穴P1～5を確認した際に、埋土中から近現代と考えられるような陶磁器片が複数出土している。S27・28を含めた3本の道路状遺構は、S02、S25・26の3本の道路状遺構よりさらに新しくなる可能性がある。

⑤ピット (柱穴) 123穴

建物を復元できない柱穴をピットとした。ピットは、条溝S03の東側に密集して発見されており、西側では、S10、S31やその周辺を除き、ほとんど見られない。

S31の柱穴の深さが10～20cmと、かなり浅いことから、西側部分はかなりの削平を受けているようだ。それは、弥生土器が多量に発見されているにもかかわらず、住居跡が確認できないことなどからもうなずける。しかし、柱穴の痕跡がなくなってしまうようなものではなく、もともと、掘立柱建物の少ない空間であると思われる。

なお、条溝S03の東側でも、総じて柱穴の深さは浅くなっており、土塁が破壊された時点を含めて、土地の削平が行われていると考えられる。

(2) 出土遺物

出土した遺物を、古い順に並べれば、弥生時代のもの、鎌倉・室町時代 (中世) のもの、江戸時代 (近世) のもの、それに明治時代以降 (近・現代) のものがある。そのほとんどが小破片の状態である。時期ごとの種類、器種は次のようになる。

弥生時代：弥生土器 (勾玉、高坏、甕など)

中世：土師器 (皿、坏など)、瓦質土器 (すり鉢、こね鉢、火鉢、甕、壺など)、須恵質土器 (甕、すり鉢など)、中国磁器 (白磁碗、白磁壺、青磁碗、染付碗、染付皿など)、鉄製

II 遺跡の概要

品（スラグ）、銅製品（器種不明）、石製品（石臼、砥石）

近世：近世陶磁器（椀など）

近代：陶磁器（椀、急須など）、銃弾、ガラス製品（おはじき）、プラスチック（器種不明）

出土遺物の中で最も古い弥生土器のほとんどは、高坏や甕の破片で、しかもかなり磨滅している。表土及び整地層、それに条溝や土坑、柱穴から出土しており、量は少ない。それらを器形からみると、ほとんどが弥生時代後期と考えられる。本来は、当遺跡内に弥生時代後期の住居跡が存在したが、後世の地面削平で破壊されたと見られる。

出土遺物の中で、最も新しいものは、江戸時代の近世陶磁器類や明治時代以降とした陶磁器やガラス、プラスチック、それに銃弾である。両者は、表土、整地層とともに道路状遺構や土坑（S08・09）から出土しており、量はごく少ない。

当遺跡から出土した遺物のほとんどは中世の遺物である。これらの遺物はほとんどが小破片の状態で、表土や整地層、それに調査区内のほとんどの遺構から出土している。特に、条溝S03とその上部に重なる道路状遺構S02、そして、土坑（S04、S05、S07、S11）からの出土が多い。また、建物の柱穴からも出土している。つまり、高岡原遺跡内の今回の調査区では、中世の遺物が圧倒的に多く、検出された遺構のほとんどが中世の時期と考えることができる。

今回の中世の出土遺物で、その形式から考古学的に年代を知ることができるのは、土師皿、瓦質土器（火鉢）、中国磁器である。それによると、その年代は全体としては13世紀から16世紀にかけての時期を示している。また、中国染付磁器に限定していえば、15世紀後半から16世紀後半にかけての時期が中心である。

(3) 調査区内の遺構群の画期と歴史性

今回の調査区で検出された遺構数は31となるが、すべてが同時に存在したわけではない。道路状遺構S01、S27～28や土坑S08～09、S23は出土遺物から見ると、近世あるいは近代の遺構である。

また、中心となる中世の遺構も、同時に存在したのではなく、いくつかの画期が想定できる。それら

を示すと以下ようになる。

A期：条溝S03が南北に伸び、その東側に複数の掘立柱建物や小さな土坑が造られる。掘立柱建物は条溝に沿うように並ぶ。想定される掘立柱建物はS14・15、土坑はS18～21・24。

B期：条溝S03が廃棄され、埋められた後に、複数の土坑が造られる。条溝に沿う掘立柱建物も存在する。想定される掘立柱建物はS12・13・16、土坑はS04～07・29・30。

C期：地形が改変され、削平された条溝S03に重なるように道路状遺構S02が、また、それに並行するように道路状遺構S25～26が造られる。

X期：出土遺物や遺構どうしの新旧関係など、条溝S03や道路状遺構S02・25～26との関係を示す要素が弱いため、時期が判然とせず、旧くも新しくもできる。想定される掘立柱建物はS10・17・31、土坑はS11・23である。

これらの画期の先後関係は、A→B、B→C（掘立柱建物や土坑を除く）は、遺構どうしの新旧関係から明らかであるが、X期については、A・Bとの関係が不明である。したがって、掘立柱建物S10・17はA期より先に存在した可能性も考えられる。ただ、道路状遺構S02と掘立柱建物S10・17の埋土は同じ黒褐色系であることから、C期になる可能性もある。

いずれにしても、今回の調査区の重要な画期はA期とB期である。A期は、条溝S03が土塁に付随する溝と考えられることから、土塁で囲まれた区画の中に、掘立柱建物群が存在する景観を想像することができる。また、B期は、条溝S03が埋められた後も、建物や土坑がつくられており、A期の遺跡の機能が残存していると考えられる。

このようなA・B期の遺構と出土遺物の時期との関係を考古学の過去の調査例に照らして類推すれば、中世の武士の館跡ということになる。ただ、今回の調査区は、館跡全体のごくわずかであり、その内容は未知の部分が多い。

Ⅲ 調査の成果

1 中世の遺構と遺物

A期の遺構と遺物

(1) S03 (条溝)

〈遺構の状況〉

調査区東部、1～1.5mの幅で調査区南端から北端まで南北に約35m続いている。おそらく、そのまま南北に延びるようだ（第4図）。

a—a'の土層図（第5図）で溝の断面を観察すると、①暗褐色土、②黒褐色土と黒褐色系の土層が皿状に堆積している。これらの土層は道路状遺構S02の堆積土である。上面が硬化しており、S03の北端から南端まで重なって続いている。

S03の土層は、③黄褐色粘土粒混じり暗褐色土、④暗赤褐色土層、⑤暗赤褐色粘質土層、⑥暗赤褐色砂質土層で、赤褐色系の土層である。これらの土層のうち、⑤・④・③は礫や小石、それに黄褐色粘土ブロックなどをかなり含んでおり、廃棄された後、自然に堆積した状況ではなく、おそらく意図的に埋められたと考えられる。

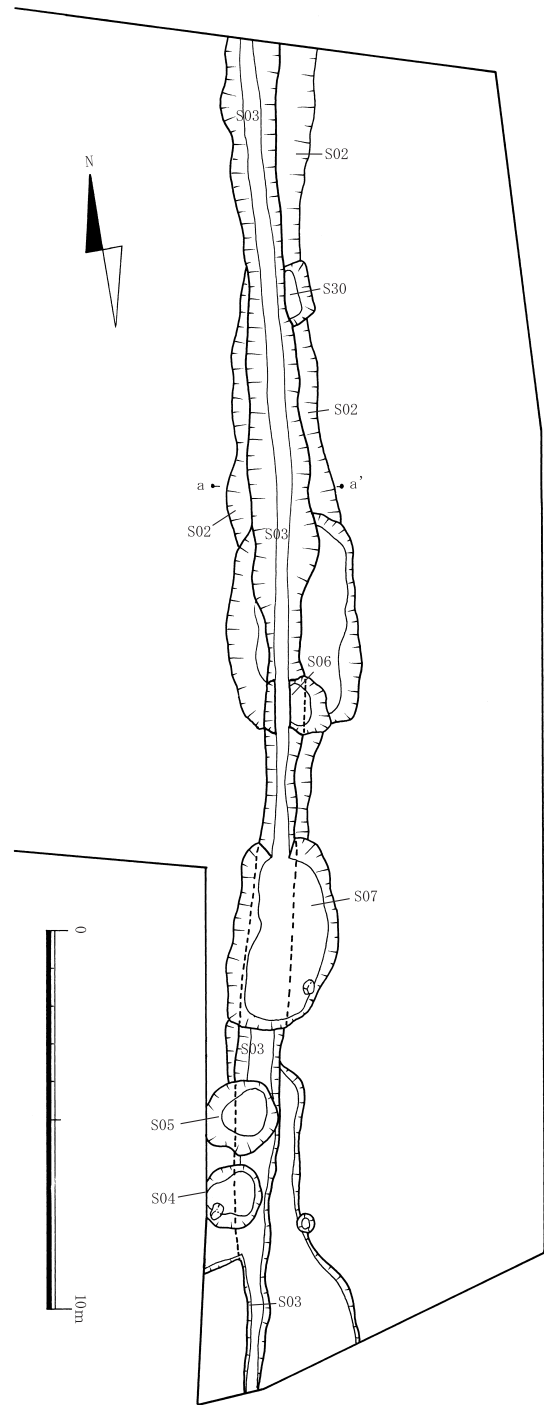
断面の形状は、③・④の東側は緩やかな傾斜であるが、⑤、⑥は東西ともU字溝のように直立した側壁の溝となっている。

S03はS06付近から徐々に削平が深くなり、南端部では底部まで10cmほどの深さしかない状態になっている。この削平はS03だけでなく、土坑S04～05・07にも及んでいる。しかもこれらの遺構の上には道路状遺構S02が確認されている。

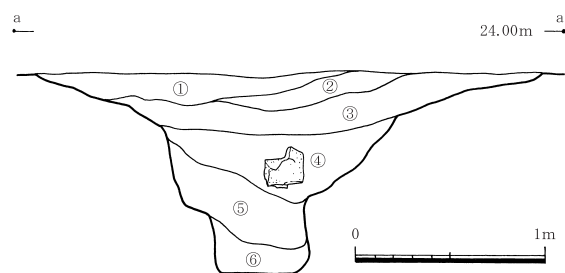
つまり、道路状遺構S02が形成される以前に地面の削平が行われたことになる。削平の深さは、調査区東南部において深くなっており、50～70cmほどである。現在は、削平された谷を埋める整地層と思われる淡黄褐色砂質土が堆積しており、表土とともに遺物包含層となっている。

〈遺物の出土状況〉（写真図版5～7）

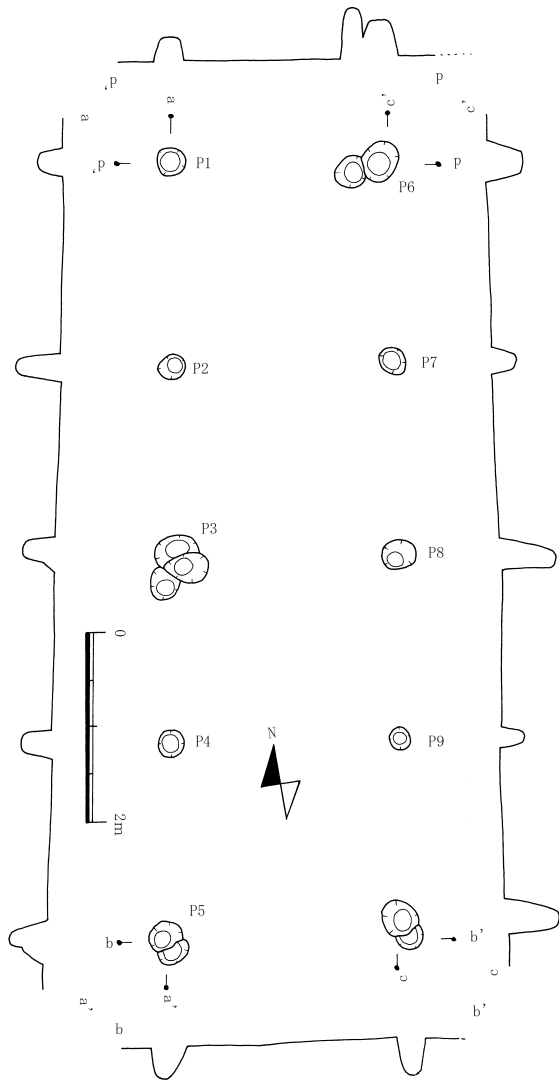
上層③や下層⑥からの出土が多く、中層④・⑤からの出土は少ない。火鉢、すり鉢類、中国磁器（青磁・染付）の出土が多く、土師器皿は少ない。



第4図 S03実測図



第5図 S02・03土層断面図



第6図 S14実測図

(2) S14 (掘立柱建物) (第6図)

〈遺構の状況〉

梁行2間以上、桁行4間の総柱を持つ掘立柱建物である。梁行は東に延びており、梁行が3間あるいは4間になる可能性もある。

柱間は梁行2.3~2.4m、桁行2~2.1mである。a—a'に対してc—c'の柱列が少し南に開いている。

柱穴の深さは30~60cmとばらつきがみられる。また、一つ一つの柱穴の直径も30cm前後で、他の建物よりも相対的に小さい。

柱穴埋土は、赤色土粒や炭化物片を含む暗褐色土で、軟質である。なお、S14はS15と建物方向が同じである。

〈遺物の出土状況〉 (写真図版7)

P8より明染付磁器で外面に細い線彫り模様。内面に花唐草文をあしらった碗の破片が出土している。

(3) S15 (掘立柱建物) (第7図)

〈遺構の状況〉

梁行2間以上、桁行4間の掘立柱建物である。

柱間は、梁行2.0~2.1m、桁行約2mと桁行がわずかに短い。

柱穴の深さは20~55cmで、30cm前後のものが多く、かなり浅い。また、柱穴の直径は30cm前後でS14と類似している。

柱穴埋土は、暗赤褐色粘質土で、黄褐色粘土粒がや炭化物がかなり混じっている。なお、S15はS14と建物方向が同じである。

〈遺物の出土状況〉

柱穴からの出土はなかった。

(4) S18~21・24・32 (土坑) (第3図参照)

〈遺構の状況〉

条溝S03の東側に、1.0~1.2mの間を置いてS03に沿うように並んでいる小土坑である。大きさ、形状とも不揃いであるが、方形のものは一辺が1.0~1.2mであり、円形のもの直径が約1.0mである。深さは、S18~21が約50cmと深く、S24・32が約10cmと浅い。おそらく、S24・32は削平が著しかったのだろう。

埋土は、S18~21が黄褐色粘土粒混じりの暗褐色粘質土で、S03の③層と共通している。S24・32は暗褐色粘質土で黄褐色粘土粒は混ざっていない。

〈遺物の出土状況〉

弥生土器の小破片が数点出土している。

B期の遺構と遺物

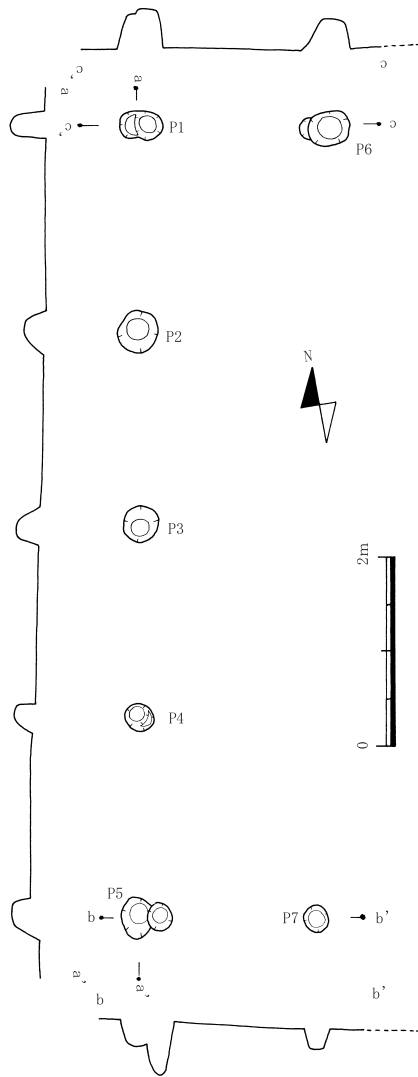
(1) S04・05 (土坑) (第8図)

〈遺構の状況〉

S04は、直径約1.5m、S05は直径約2mの円形をしており、南北に近接して造られている。断面は巾着袋のように底部が広がる形状をしている(第9図)。2基とも現状での深さは約70cmであるが、S03と同じく、2基とも50~60cmほど上部を削平されており、本来の深さは1mを超えるようだ。

また、削平された上には道路状遺構S02が形成され

III 調査の成果

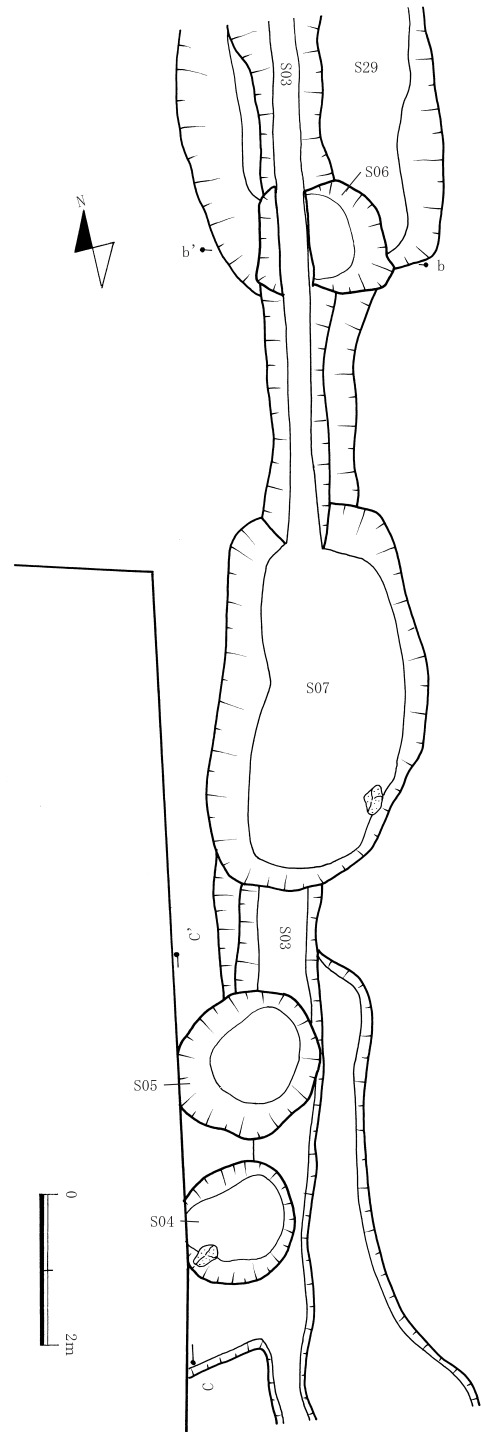


第7図 S15実測図

ている。

第9図の土層断面図から、その変遷を追うと次のようになる。土坑に関する埋土は、⑤黄褐色粘質土混じり暗褐色土、⑥暗赤褐色砂質土、⑦暗赤褐色粘質土、⑧暗赤褐色土混じり黄褐色粘質土であり、褐色系の土層である。これらの土層のうち、⑤、⑧は異質の土がブロック状態で混じりあっており、自然堆積ではなく、意図的に埋められた土層であろう。つまり、土地利用を変えるため、土坑が埋められ、また、削平されたようだ。

⑤の上には、④黒褐色土、その上には③黄褐色粘質土混じり赤褐色土、②黄褐色粘質土があり、2層とも上面が固く硬化している。④・③・②は道路状遺構S25を形成している土層である。①は削平された



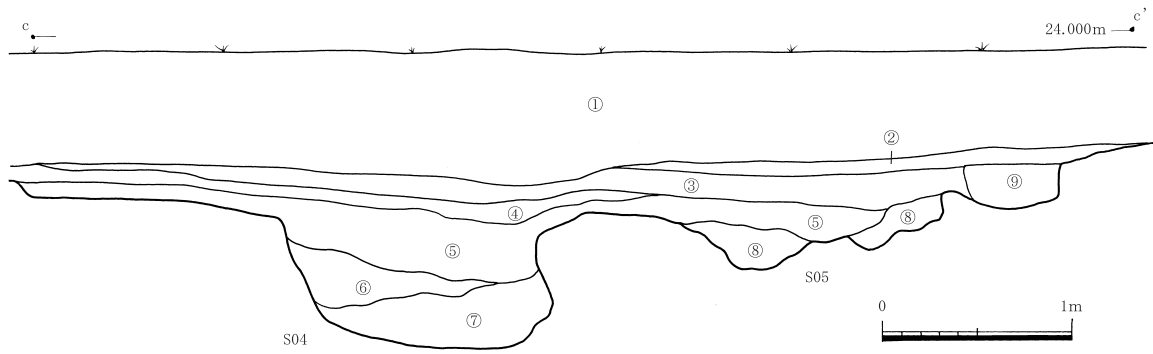
第8図 S04～07実測図

谷を埋める整地層と思われる淡黄褐色砂質土であり、表土とともに遺物包含層となっている。

〈遺物の出土状況〉 (写真図版9)

遺物の出土数は8点と少ない。花崗岩製石臼、火鉢、土師器皿、釜、砥石、中国製磁器が出土している。

III 調査の成果



第9図 S04・05土層断面図

(2) S06 (土坑) (第10図)

〈遺構の状況〉

S06は、長辺約2m、短辺約1.5mと長方形をしている。四方の側壁は傾斜があり、箱形の土坑といえる。深さは70cmほどである。当初、土坑の存在に気づかず掘り進めたが、その後、S03との新旧関係を把握することができた。第10図は両者の土層断面図である。⑤炭化物混じり暗赤褐色粘質土と⑥暗赤褐色砂質土は、条溝S03の埋土であり、④暗赤褐色土混じり暗褐色土、③暗褐色粘質土、②黄褐色粘土粒混じり暗褐色土、①黄褐色粘土粒混じり暗褐色土が土坑S06の埋土である。上部がなくなっているが、①とS03の堆積土層③は同様の土質になっている。このこととS02の硬化面が続いていることを考慮すれば、①はS02関連の土層の直下になる可能性が強い。

いずれにしても、S06において、条溝より土坑が新しいこと、そして、土坑が埋まった後に道路状遺構S02が形成されていることがわかる。

〈遺物の出土状況〉

S03と重なり合っていたため、S06の存在に気づくのが遅れ、遺物の分離ができなかった。ただ、ほとんど遺物は出土していない。

(3) S07 (土坑) (第8図)

〈遺構の状況〉

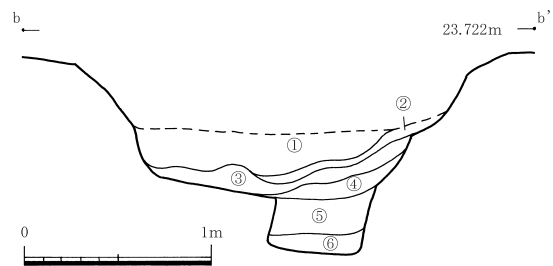
長辺約4.5m、短辺約2.5mで、隅丸方形に近い形状である。底部は、ほぼ平らで、側壁は角度を持って立ち上がっている。残念ながら北から南にかけて、斜めに削平されているため、中心部分で約30cmの深さしかないが、本来は1mほどの深さであろう。

S07は、S03を掘り進める中で検出されており、土

層観察によれば、S07がS03より新しいことが判明している(写真図版3)。また、中央部での埋土は黄褐色粘質土のブロックが混じった暗赤接褐色土であり、土坑S04と同様である。

〈遺物の出土状況〉 (写真図版9・10)

S02、S03と重なり合っていたため、当初、土坑の存在に気づかず、S03として取り上げた遺物が多い。S07出土の遺物には、すり鉢、こね鉢、灰釉須恵質陶



第10図 S03・06土層断面図

器、羽釜、竈支柱、砥石とともに鉄釘や鉄スラグがある。

鉄スラグの出土で、土坑内に鍛冶炉が設置されていた可能性も考えられた。しかし、土坑の精査でも火床らしき焼成痕跡は発見できなかった。

(4) S12 (掘立柱建物) (第11図)

〈遺構の状況〉

梁行2間、桁行3間の総柱掘立柱建物である。柱間は、梁行約1.6~1.9m、桁行約2~2.3mである。梁行西側の柱間(P2-P6、P3-P7、P4-P8)は1.6mと東側の柱間の2mに比べかなり短く、また、S13と同じく、北側梁行の間柱は東に寄っている。建物構造の特徴かもしれない。

柱穴の直径は30~40cmで、柱穴の深さは約40~

III 調査の成果

55cmほどである。当調査区ではS10とともに最も深い。柱穴埋土は、S13と同様に炭化物や赤色土粒が混じった暗褐色で、軟質である。

〈遺物の出土状況〉 (写真図版7)

柱穴P1中ほどより、草花文染付皿破片が出土して

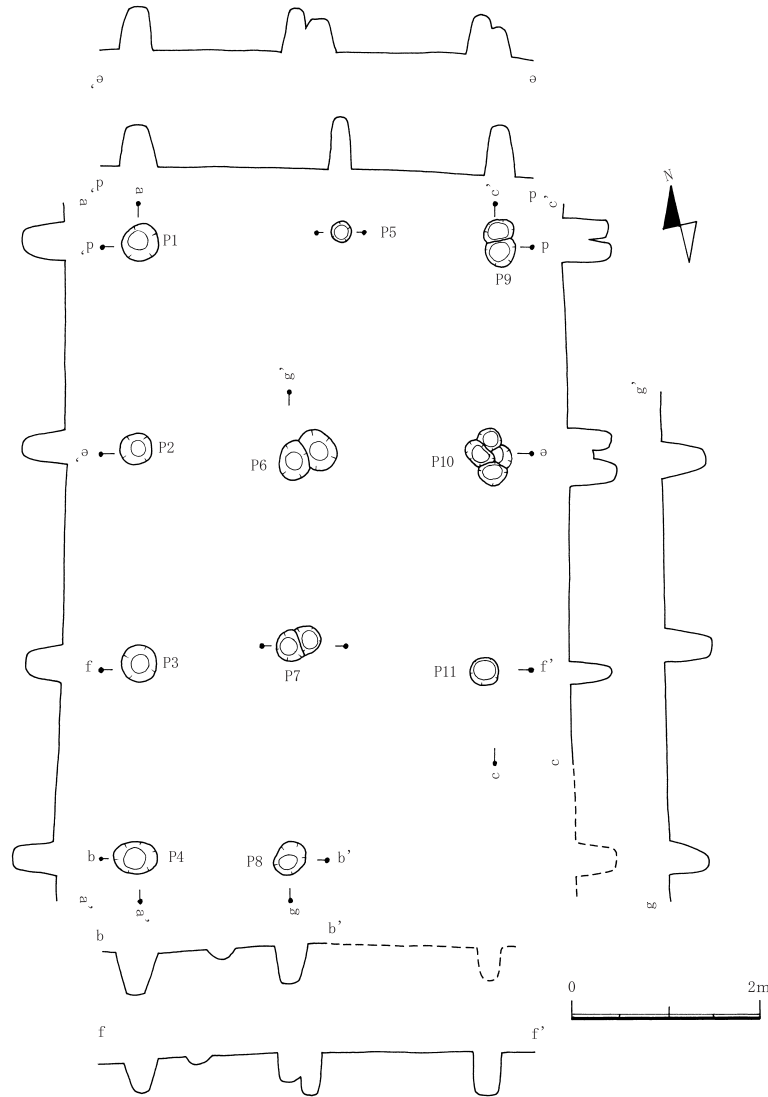
粒や炭化物片を含む暗褐色土で、軟質である。

〈遺物の出土状況〉

柱穴からの出土はなかった。

(6) S16 (掘立柱建物) (第13図)

〈遺構の状況〉



第11図 S12実測図

いる。他の柱穴からは遺物の出土はなかった。

(5) S13 (掘立柱建物) (第12図)

〈遺構の状況〉

梁行2間、桁行3間で、東に桁行が延びる掘立柱建物である。柱と柱の間隔(柱間)は、梁行約3m、桁行約2mで、梁行の柱間はかなり短い。また、西側梁行の間柱は南に寄っており、S12と類似する。

柱穴直径は30~35cmで、柱穴の深さは40~55cmほどである。柱穴埋土はS12、S14、S16と同じ、赤色土

梁行2間以上、桁行4間以上の掘立柱建物になると思われる。検出されたのは建物西側の柱列である。梁行、桁行ともに調査区外の東側に展開しており、確定できない。建物方向はS12・13と同じである。

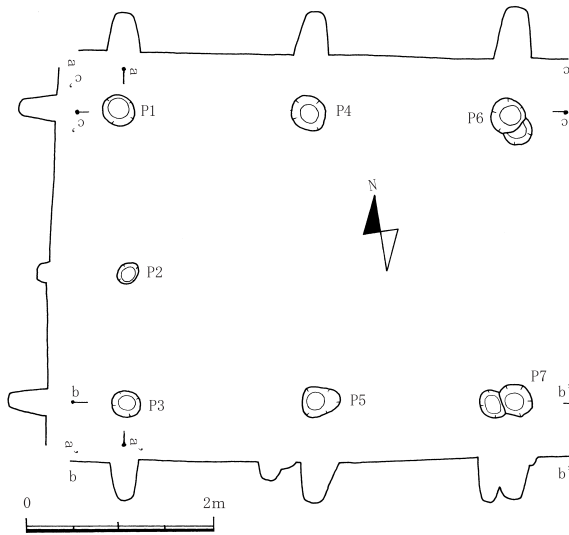
柱間は、桁行約2mで、梁行は不明である。柱穴の深さは35~60cmで、50cm前後のものが多い。柱穴の直径は30~35cmでS13~15と類似している。柱穴埋土は、赤色土粒や炭化物片を含む暗褐色土で、軟質である。柱穴埋土はS12・13に類似する。

〈遺物の出土状況〉

柱穴からの出土はなかった。

C期の遺構と遺物

(1) S02・25・26 (道路状遺構) (第3図参照)



第12図 S13実測図

〈遺構の状況〉

3つの道路状遺構は、すでに表土剥ぎの段階から硬化面が露出しており、硬化面のみが同一の深さで、並んで発見された。遺構の幅は不規則であるが、S25・26では1.0～1.4m、S02では、計測地点が設定できないため不明であるが、2m前後と考えられる。

また、3つの道路状遺構は、主軸がいずれも東北から南西にかけて走っており、S01・27・28の3つの道路状遺構より東に振れている。

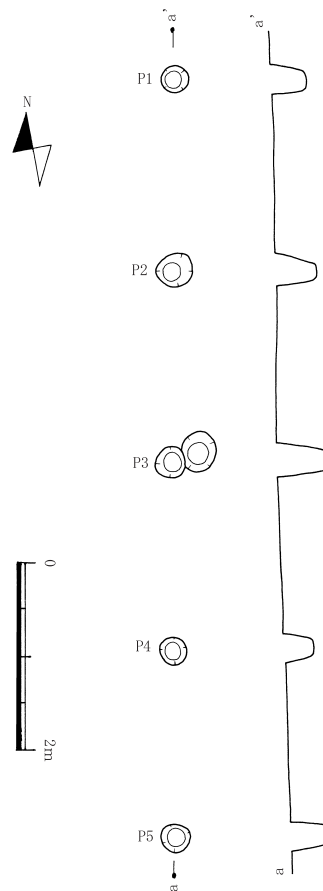
S02は、条溝S03が埋められた後に、条溝の跡にできた道路状遺構であり、ほぼ条溝の最上部に硬化面ができています。この硬化面は、土坑S04・05の土層断面図に示した③層にあたる。

S25・26は、おそらく土壘が撤去された跡に、S02と並行するように、S02の後にできたと考えられる。S25の硬化面は、土坑S04・05の土層断面図に示した②層と考えられる。

〈遺物の出土状況〉 (写真図版8)

S02はS03と重なり合っているため遺物の出土数が多かった。S25・26は、削平が硬化面まで達してお

り、遺物の出土はなかった。



第13図 S16実測図

S02からは、中国磁器の出土が多く、白磁碗・皿、青磁碗、染付磁器碗・皿がある。その他に、すり鉢、こね鉢、火鉢、羽釜、須恵質陶器甕、砂岩製石臼が出土している。

S02は道路状遺構と考えられることから、これらの遺物は、S02造成の際にS03や周辺の遺構からもたらされたと思われる。

X期の遺構と遺物

(1) S10 (掘立柱建物) (第14図)

〈遺構の状況〉

梁行2間、桁行4間以上の掘立柱建物であるが、南側梁行に間柱が見当たらないので、おそらく桁行5間になると思われる。建物方向は、磁北からやや東に振れている。

柱間は、梁行は約1.8mであるが、桁行の柱間は、約2mと約1.8mが交互にあらわる。桁行5間であれば、北から2m→1.8m→2m→1.8m→2mという順になる。

III 調査の成果

西側桁行柱列は、いずれも道路状遺構S01の底部で検出した。深さがほとんどなく、その大きさや柱穴埋土も不確定要素が多い。

柱穴直径は50～60cmと当調査区では最も大きく、深さも40～60cmと最も深くなっている。柱穴底部は、他の建物よりも固く硬化しており、かなり長期間使用されたと考えられる。

柱穴埋土は黄褐色粘土ブロックが混じる黒褐色粘質土である。

〈遺物の出土状況〉

残念ながら、柱穴からの遺物は、磨滅した弥生土器小破片が数点に過ぎず、時期を探る手がかりとなる遺物は出土しなかった。

(2) S17 (掘立柱建物) (第15図)

〈遺構の状況〉

梁行2間、桁行2間の掘立柱建物である。桁行の柱間が約2.5mであるのに対して、梁行の柱間は約2.0mであるから、桁行がかなり長い。

柱穴直径は、40～50cmと大きく、深さも40～60cmとなる。また、柱穴埋土も黄褐色粘土粒が混ざる黒褐色粘質土で、S10と類似する。

柱穴埋土は固く、P2、P4では柱痕跡が明確に確認できた。柱穴底部もしっかり硬化しており、長期間使用されたことがわかる。建物方向は、S10と同じく、磁北よりやや東に振れている。

〈遺物の出土状況〉

柱穴からの出土はなかった。

(3) S31 (塀) (第2図参照)

〈遺構の状況〉

現状で4本の柱が、ほぼ磁北方向に並んでいる。一応、塀とした。南側が低い地形となっており、削平されたと考えられることから、おそらく、板塀であり、S10を囲んでいたのかもしれない。

柱間は不揃いで、直径も約25cmで、深さも10～20cmと浅い。柱穴埋土はS10と類似する。

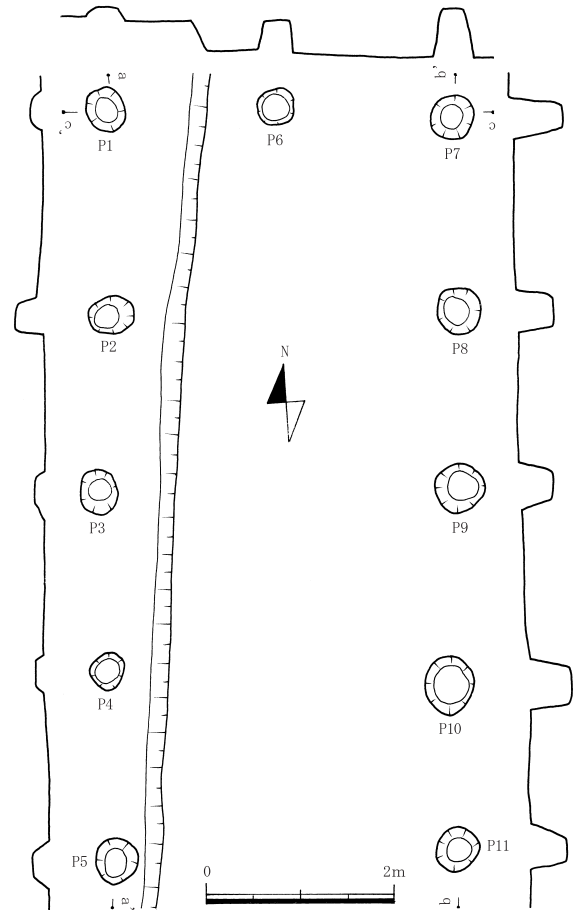
〈遺物の出土状況〉

柱穴からの遺物の出土はなかった。

(4) S11・23 (土坑) (第3図参照)

〈遺構の状況〉

S11は長軸4.8m、短軸2.2m、S23は長軸5.4m、短軸



第14図 S10実測図

2.2mで、隅丸方形（小判形）をした土坑である。両土坑とも、深さは中央部で約25cmで、底部からは緩やかに立ち上がる。

調査区西側から中央部にかけても、地形が20～30cmほど削平されていると予想されるが、本来の土坑の深さがどれほどだったかは不明である。

S11、S23ともに調査期間終了近くに検出されたため、発掘を優先し、図は平板による測量のみで終了している。なお、S23からの遺物は弥生土器の小破片のみであった。

〈遺物の出土状況〉 (写真図版10)

S11は底部まで浅く、遺物の出土は少なかった。中国陶磁青磁碗、同じく白磁壺、土師器の破片が出土している。

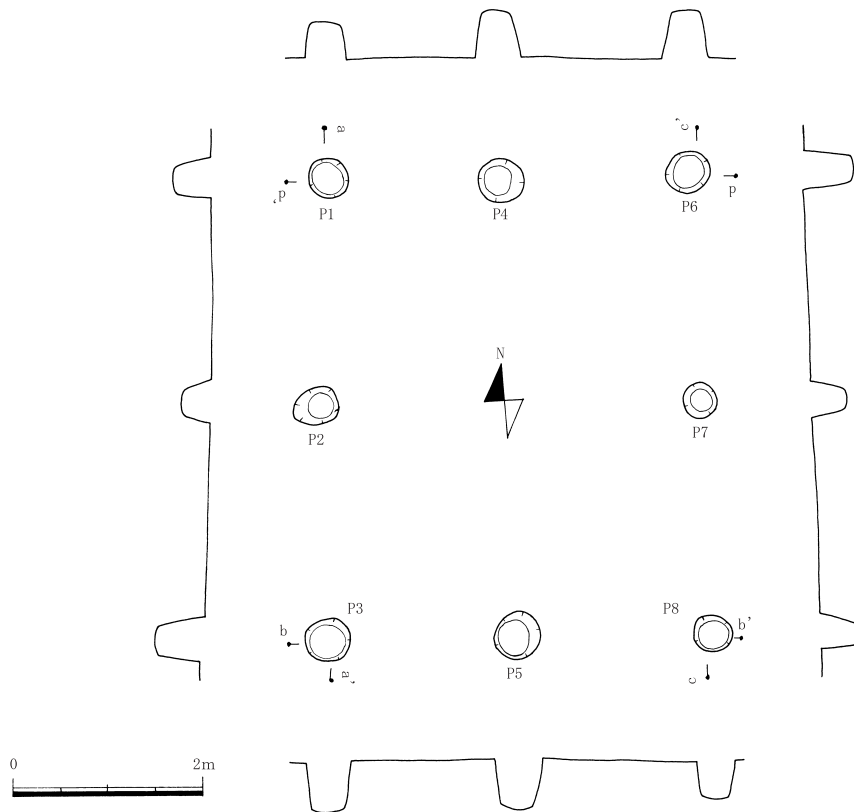
2 近世・近代の遺構と遺物

(1) S01・27・28 (道路状遺構) (第3図参照)

〈遺構の状況〉

調査は、道路状遺構の硬化面を検出したのみであ

III 調査の成果



第15図 S17実測図

り、道路を造った際の最初の掘削部までの完掘はできなかったが、S01の一部でトレンチを設定し下部を確認した。

3本の道路状遺構は、いずれも似たような形状を見せている。3本とも、皿状に約10cm窪んだ幅約4mの直線の溝がある。その中央部には、さらに窪みがあり、人が往来した際の地面の硬化部が見られる。S01では硬化部の窪みが約30cmであった。

硬化部の幅は、S01が約1.8m、S28が約1.6～1.8m、S27が約1.8～2.1mである。なお、S27、S28ともに近年の果樹園造成により硬化部が露出していたため、本来の硬化部の深さは不明である。

〈遺物の出土状況〉（写真図版10）

いわゆる近世陶磁器類が出土しており、緑色の釉がかかった破片も見られる。

(2) S08・09・22（土坑）（第3図参照）

〈遺構の状況〉

S08は、長軸1.8m、短軸1.6mの方形、S09、S22は、直径約1.5mの円形の土坑である。

S08は板を敷いたような平たい底部から垂直に四方

の側壁が立ち上がっており、深さは約30cmである。

S08からは、化粧壇の破片のようなプラスチックが出土しており、戦後から近年にかけて造られた可能性がある。埋土も青灰色のグライ土壤のブロックを含んでおり、フカフカで締まりがない。

S09とS22は碗状に窪んでおり、人ひとりが立つことができるほどの底部がある。深さは約50cmであり、埋土は、黄褐色粘土粒が混ざった暗褐色粘質土である。道路状遺構S25・26と重なっており、土坑のほうが新しい。

遺物はほとんど出土しなかったが、S09から銃弾が出土した。

両土坑は、形状や大きさなど重なるように似通っており、同時に造られた可能性が強い。

〈遺物の出土状況〉（写真図版10）

S08からは、乳白色のプラスチック破片が出土している。近年に造られた土坑であろう。

S09からは、鉛製で円形の銃弾が出土している。底部近くからの出土であり、混入の形跡もない。

※ 参考文献一覧

〈玉名市の歴史に関して〉

- ①『玉名市歴史ガイドブックふるさと文化財探訪』平成20年3月 玉名市教育委員会
- ②『玉名市史-資料編3自然・民俗-』平成5年3月 玉名市
- ③『玉名市史-通史編上巻-』平成17年3月 玉名市

〈高岡原遺跡の調査に関して〉

- ①発掘速報「玉名市高岡原遺跡」荒木純治『歴史玉名』第11号所収 平成4年11月 玉名歴史研究会
- ②『玉名市内遺跡調査報告書Ⅰ-平成11・12年度の調査-』玉名市文化財調査報告第11集 平成14年3月 玉名市教育委員会
- ③『玉名市内遺跡調査報告書Ⅱ-平成13・14年度の調査-』玉名市文化財調査報告第13集 平成16年3月 玉名市教育委員会
- ④『玉名市内遺跡調査報告書Ⅲ-平成15・16年度の調査-』玉名市文化財調査報告第15集 平成18年3月 玉名市教育委員会
- ⑤『玉名市内遺跡調査報告書Ⅳ-平成17・18年度の調査-』玉名市文化財調査報告第17集 平成20年3月 玉名市教育委員会
- ⑥『玉名市内遺跡調査報告書Ⅴ-平成19年度の調査-』玉名市文化財調査報告第18集 平成21年3月 玉名市教育委員会
- ⑦『玉名市内遺跡調査報告書Ⅵ-平成20年度の調査-』玉名市文化財調査報告第21集 平成21年12月 玉名市教育委員会

〈玉名市内の中世城・港の調査に関して〉

- ①『高瀬湊関係歴史資料調査報告書(1)』玉名市歴史資料集成第1集 昭和63年3月 玉名市
- ②『岩崎城跡』玉名市文化財調査報告第12集 平成15年3月 玉名市教育委員会
- ③『伊倉城跡-伊倉城跡範囲確認調査報告-』玉名市立歴史博物館ころろピア資料集成第5集 平成15年3月 玉名市立歴史博物館ころろピア
- ④『伊倉城跡-市道船津宮原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査-』玉名市文化財調査報告第27集 平成25年3月 玉名市教育委員会

〈出土遺物に関して〉

- ①『大宰府条坊跡XⅤ-陶磁器分類編-』大宰府市の文化財 第49集 平成12年3月 大宰府市教育委員会
- ②『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 2001年 真陽社
- ③「熊本県における中世前期の土師器について」美濃口雅朗『中近世土器の基礎研究X』所収 1994年
- ④『陶磁器染付文様事典』三杉隆敏・榊原昭二編著 1989年 柏書房

IV 総括

1 中世大野氏一族の館跡か

今回の調査の考古学的な成果は中世の城館の発見です。武士は日ごろ館に住まいし、いざ戦となれば城に籠ります。ただ、土塁を伴うとみられる条溝S03の発見は、館も戦の際には城となることがわかります。

この館、誰の館だったのでしょうか。『玉名市史』に掲載された①「由緒書上」と②「玉名郡村岡山田村絵図」の古文書がその示唆を与えてくれます。①は、弘治三（1557）年に大野一族の紀崇善が著したもので、初代大野国隆が「中尾高岡の居屋敷」に住んだことがわかります。②では、明治初期、今回の調査地が「高岡」という字名であることがわかります。しかも調査地の南は「馬場」という字名になっています。また、遺跡の年代は14c～16cが中心です。

つまり、紀崇善が由緒書を著した16c中頃に今回の調査地に館が実際に存在したことになります。これらのことは、大野国隆の居屋敷であるとまでは言えないものの、大野一族の館であった可能性が高くなります。しかも武士が武芸を鍛錬する「馬場」という地名の存在もこれを支えます。

2 出土遺物からわかる館跡の年代

今回の調査で出土した遺物で、考古学的に年代を判断できるのは、土師器皿、火鉢、中国陶磁器です。これらの遺物が数多く出土した条溝S03、それにS03の上部にできた道路状遺構S02の遺物群からは、次のことがわかります。

S03の最下層には、少数ながら明染付磁器など15c後半～16c後半の遺物が含まれます（美濃口雅朗氏、竹田知美氏の御教示による）。また、S03上部層からS02下部層は条溝を埋めた層であり、周辺の土で条溝を埋めたと考えられます。その層から出土した土師器皿や火鉢は14c～15cの年代を示し、また、中国磁器は13c～16c後半の年代を示しています。

これらのことから、館は14cには存在し、16cまで持続したと考えられます。

3 館跡の範囲は

II-3-(3)で記述したように、B期には条溝S03は埋め戻され、掘立柱建物群とともに土坑が新たに造られていると分析しました。つまり、館の土塁が撤去されたこととなります。このことを消極的にとらえれば、外部勢力が館を占拠し、防衛的な機能を消滅させたこととなります。積極的にとらえるなら、16c代後半、戦国時代の終わりに、館を拡張したとみるができます。この場合、より西と北側に拡張し、境川が浸食した崖面を活かし、城としての機能を強化したと予想されます。

戦国時代の終わり、肥後の一円支配に失敗した菊池氏の勢力は急速に衰えます。菊池一族の高瀬氏とともに大野一族が実効支配した貿易港高瀬は、九州の有力戦国大名として勢力を拡大させた豊後大友氏や肥前竜造寺氏に何度も攻め入られた歴史を持っています。第16図は玉名市歴史ガイドブック「ふるさと文化財探訪」に掲載された大野氏一族の城館分布です。旧街道沿いに築かれた14もの城館、中でも、マジノ線のように最後の壁として境川左岸に築かれた3(中尾高岡屋敷跡)、5(中尾城跡)、6(中村館跡)の城館は、玉名の中心部や港町高瀬を必死に守ろうとした一族の意思を感じさせます。

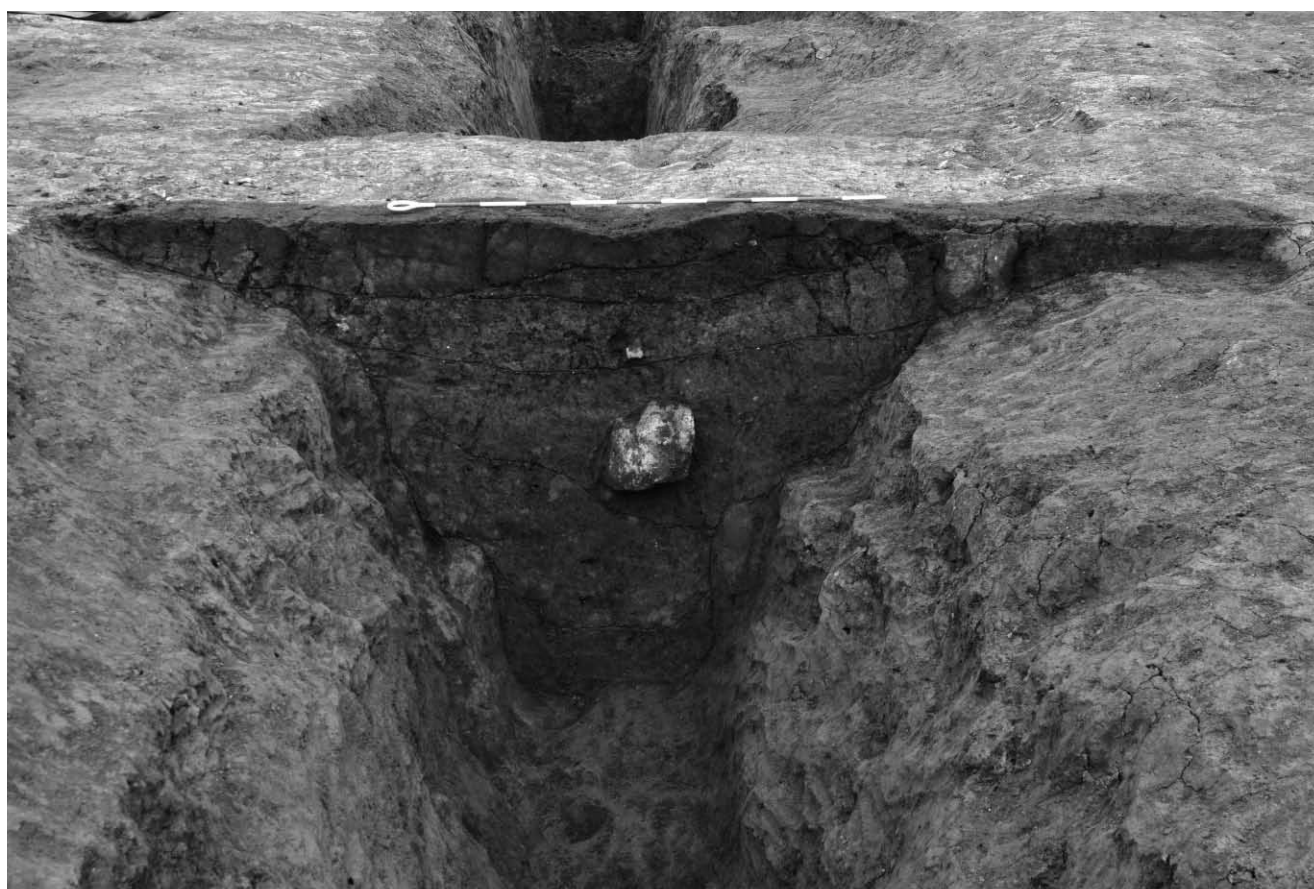


No.	遺跡名	所在地	伝城主
1	日嶽城跡	岱明町開田	大野一族
2	古城跡	岱明町開田	大野一族
3	高岡屋敷跡	山田	大野国隆
4	岩崎城跡	岩崎	岩崎氏
5	中尾城跡・ホカンヤカタ	中尾	不明
6	中村館跡	春出	大野加志麻呂・登得麻呂
7	築地館跡	築地	築地氏
8	築地次郎国秀館跡	岱明町下前原	築地次郎国秀
9	上村城跡	岱明町上	大野一族
10	陣館跡	岱明町三崎	不明
11	中土屋敷跡	岱明町中土	不明
12	下村城（内野城）跡	岱明町大野下	齊院次官親能
13	高道城跡	岱明町高道	大野一族（池松貞胤）
14	扇崎北垣右京居館跡	岱明町扇崎	北垣右京

第16図 大野別符内城館位置図



1 S02・03遠景(南より)



2 S02・03土層断面(上部暗褐色土がS02、以下はS03)

図版1 S02・03遺構写真



1 S06土層断面(s06が条溝S03を切り込んでいる)(北より)



2 S03東側柱穴群(ピンポールが立つのは復元できる建物の柱)(南より)

図版2 S06・東側柱穴群遺構写真



1 S04・05遺構写真(s03を切り込んでいる)(東より)



2 S07遺構写真(s03を切り込んでいる)(北より)

図版3 S04・05・07遺構写真



1 S01・10遺構写真(S01の底部でS10の柱穴を確認)(北より)

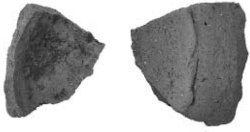


2 S12遺構写真(S03とS12との間に余地がない)(南より)

図版4 S01・10・12遺構写真



1土師器皿



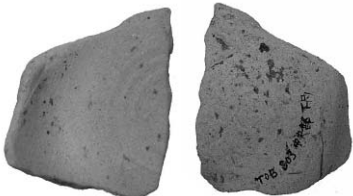
2土師器皿



3土師器皿



4土師器皿



5土師器皿



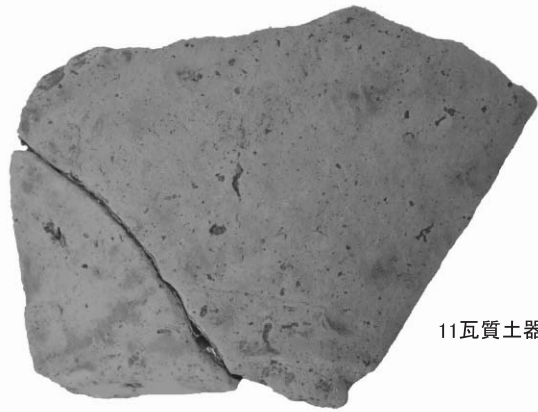
6土師器皿



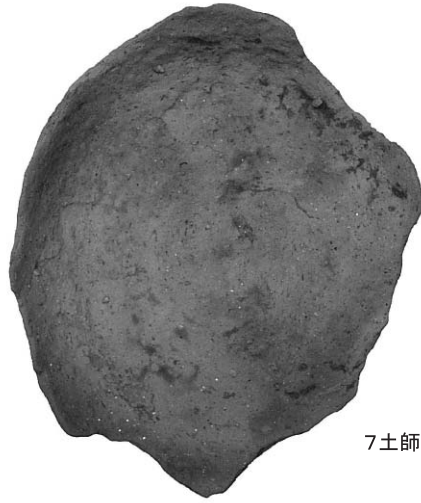
8須恵器鉢底部



12有孔石製品(軽石製)



11瓦質土器(播鉢)底部



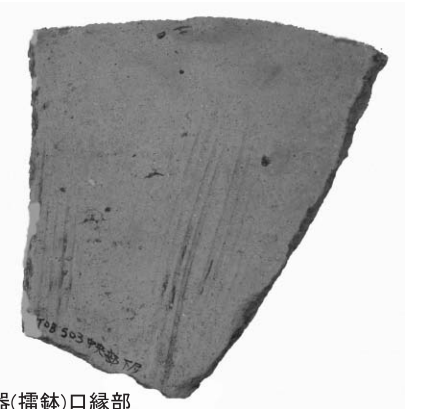
7土師器皿



9瓦質土器(播鉢)口縁部



10瓦質土器(播鉢)口縁部



図版5 S03出土遺物

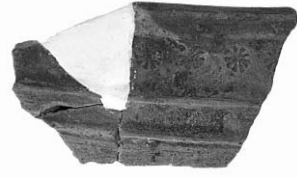
大きさ(1~8は1/2、他は1/3)



1瓦質土器(播鉢)底部



4瓦質土器(釜)口縁部



6瓦質土器(火鉢)口縁部



2瓦質土器(捏鉢)底部



7瓦質土器(火鉢)底部



3瓦質土器(釜)羽部



8瓦質土器(火鉢)底部(脚部)



5瓦質土器(鍋)口縁部



9瓦質土器(火鉢)底部(脚部)

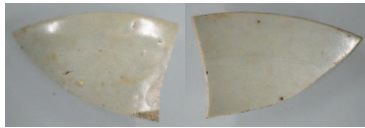


10瓦質土器(火消壺)底部



図版6 S03出土遺物

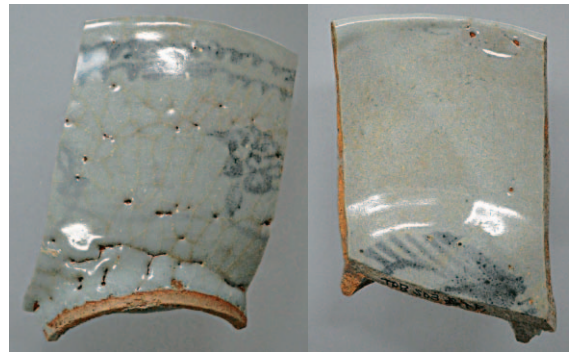
大きさ(全て1/3)



1中国白磁碗口縁部



2中国龍泉窯系青磁碗底部



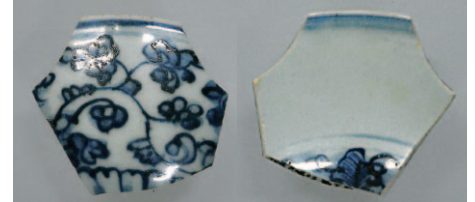
4中国明染付(葡萄文)磁器碗



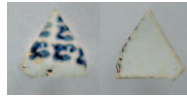
3中国龍泉窯系青磁碗底部



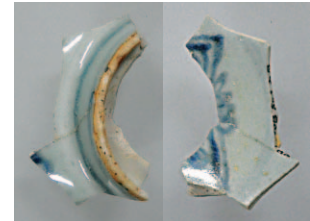
6中国明染付磁器碗口縁部



5中国明染付(花唐草文)磁器碗口縁部



7中国明染付磁器碗口縁部



10中国明染付磁器碗底部



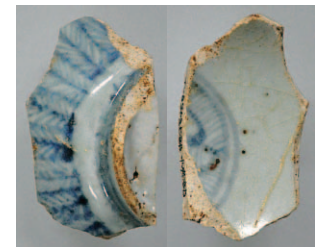
13中世陶器彩釉壺底部



8中国染付(草花文)磁器口縁部



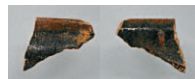
9中国染付(草花文)磁器口縁部



11中国染付磁器碗底部



14中世灰釉陶器耳付壺肩部



12天目茶碗口縁部



18中国明染付磁器碗底部(S14P8)



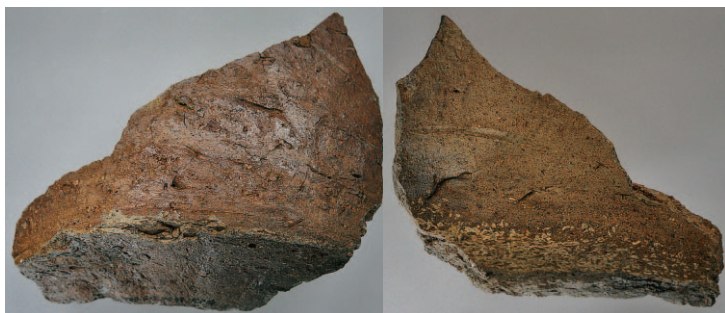
15中世陶器鉢胴部



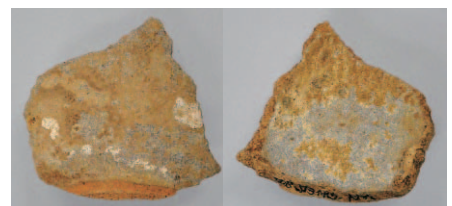
17土師器皿底部



19中国明染付磁器碗底部(S12P1)



16中世陶器甕底部

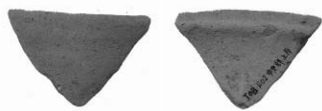


20中世灰釉陶器壺胴部

図版7 SO3・柱穴出土遺物(SO3:1~16, 柱穴:17~20) 大きさ(16・17は1/3、他は1/2)



1土師器皿



2瓦質土器(播鉢)口縁部



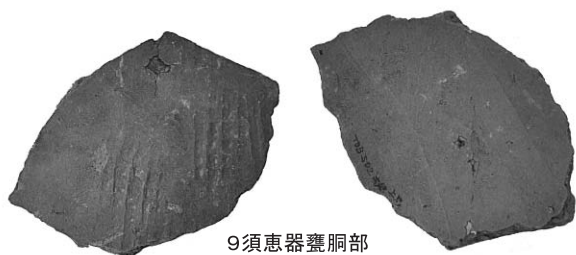
3瓦質土器(播鉢)口縁部



4瓦質土器(釜)口縁部



5瓦質土器(火鉢)口縁部



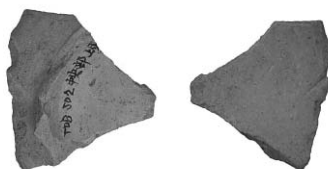
9須恵器甕胴部



23石臼(砂岩・上臼)



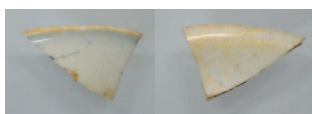
6瓦質土器(火鉢)口縁部



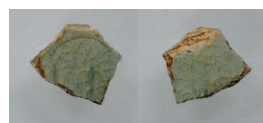
7須恵器高台付椀底部



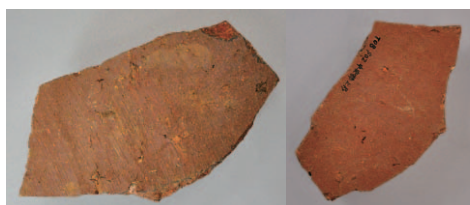
8須恵器壺口縁部



11中国青磁皿口縁部



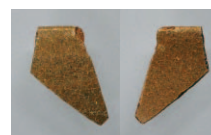
12中国青磁椀口縁部



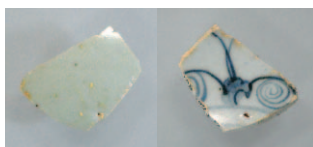
10中世陶器甕胴部



13中国白磁壺底部



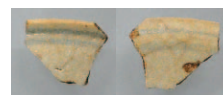
14中国青磁椀口縁部



16中国明染付(草花文)椀胴部



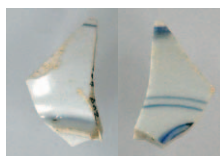
15中国白磁皿胴部



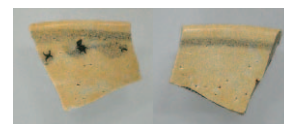
20中国明染付椀口縁部



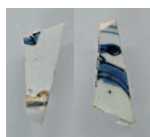
17中国明染付椀口縁部



19中国明染付皿



21中国明染付椀口縁部



18中国明染付皿底部



22針状青銅製品



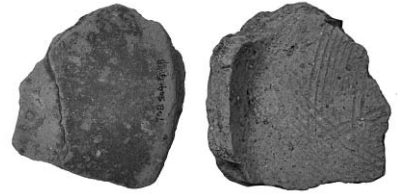
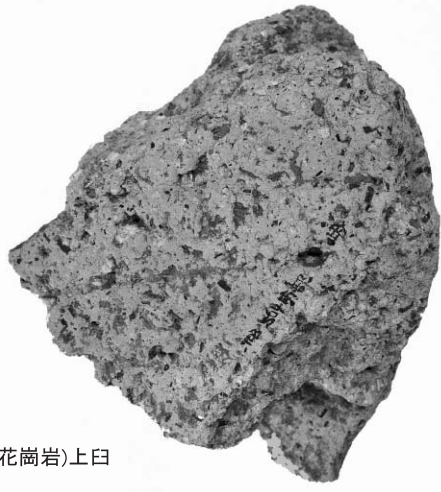
24碧玉製勾玉

図版8 S02出土遺物

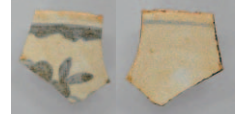
大きさ(1~6,9,10,23は1/3、他は1/2)



1石臼(花崗岩)上臼



2瓦質土器(播鉢)底部



3中国明染付(草花文)椀口縁部



5土師器皿底部



4瓦質土器(火鉢)口縁部



6瓦質土器(鍋)把手部



7砥石(天草陶石)



8瓦質土器(釜)口縁部



11支脚形土製品



13鉄釘(鍛造)



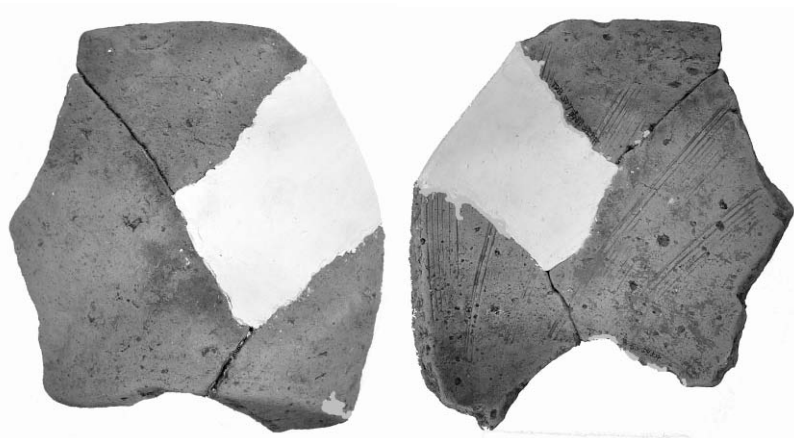
9瓦質土器(播鉢)口縁部



12砥石(天草陶石)



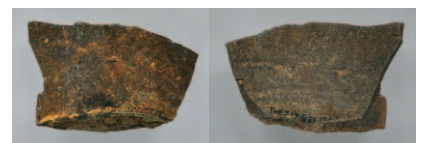
14鉄スラグ



10瓦質土器(播鉢)口縁部



15須恵器甕胴部



16中世陶器底部

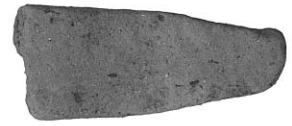
図版9 S04・05・07出土遺物(S04:1~4, S05:5~7, S07:8~16) 大きさ(3,5,13,16は1/2, 他は1/3)



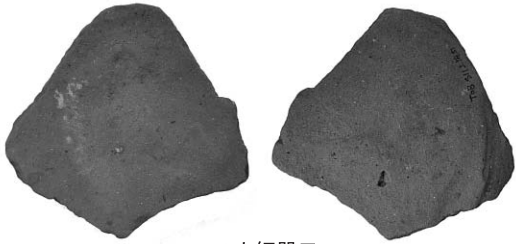
1瓦質土器(火鉢)口縁部



2板状プラスチック破片



3支脚形土製品



6土師器皿



5土師器皿



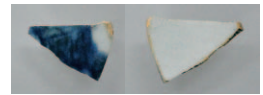
4鉛銃弾(球形)



8中国龍泉窯系青磁碗底部



7土師器皿



10近世染付磁器碗



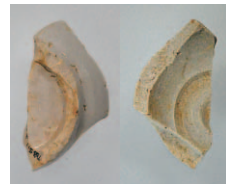
11近世染付(草花文)磁器碗口縁部



15中世陶器壺底部



16中国白磁壺底部



9中国白磁壺底部



12近世染付磁器湯呑茶碗口縁部



13近世白磁壺胴部



17中国龍泉窯系青磁底部



18ガラス製お弾き



14近世灰袖陶器壺(徳利)胴部

図版10 S07・08・09・11・01・遺構検出面出土遺物

(S07:1,S08:2~3,S09:4,S11:5~9,S01:10~14,遺構検出面:15~18)

大きさ(1,3,5~7は1/3,他は1/2)

報告書抄録

ふりがな	たかおかばらいせき							
書名	高岡原遺跡							
副書名	玉名市山田における店舗新築工事に伴う文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	古森 政次							
編集機関	玉名市教育委員会							
所在地	熊本県玉名市岩崎163							
発行年月日	平成29年(2017)3月24日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たかおかばらいせき 高岡原遺跡	たまなしやまだたかおか 玉名市山田高岡	43206	256	32° 56' 12"	130° 32' 30"	2016.8.8～ 2016.9.30	960m ²	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
たかおかばらいせき 高岡原遺跡		中世後期	土坑・溝状遺構・掘立柱建物跡	輸入陶磁器・瓦質土器・国産陶磁器・石製品など			溝東側に並行して掘立柱建物跡を数基検出。文献にみられる「中尾高岡屋敷」の推定地。	

玉名市文化財調査報告 第35集

高岡原遺跡

—玉名市山田における店舗新築工事に伴う文化財調査報告書—

平成29(2017)年3月15日印刷

平成29(2017)年3月24日発行

発行 玉名市教育委員会
〒865-8501 熊本県玉名市岩崎163

印刷 株式会社 有明印刷
〒865-0022 熊本県玉名市寺田123-1

